

## 藤田大介：ナホトカ号の事故で流出した重油の沿岸漂着と海藻 II — 石川県でのその後 —

石川県では、春を迎えても重油の回収作業が綿々と続けられた。回収は、漁獲物への風評被害が懸念されたため、油処理剤は用いられず、もっぱら人海戦術で行われた。なお、環境への配慮から、油を微粒子化して飛散させる高圧ポンプ類についても、使用は極力押さえられた。当初、気の遠くなるような除去が想定されていたが、県内は勿論、県外からも多数のボランティアの参加や自衛隊の出動があり、地道な除去作業が続けられ、事態は比較的早く收拾することができた。しかし、重油の除去は過酷な労働で、気分が悪くなったり怪我をしたりした人が続出したほか、犠牲者も出たことは忘れてはならない。

事故から2カ月後、羽咋市など、一部の沿岸市町では、再漂着も収まり除去も進んだことから、一次終息宣言が出された。全県的な油災の区切りとなったのは、4月27日に重油漂着18市町で一斉に行われた「ビーチリカバリー県民運動」の海岸清掃で、翌28日には県災害対策本部も解散された。その後、5月に入り、能登半島沖合に浮かぶ舳倉島や七つ島などについて、海女らによる仕上げの回収が行われた。5月22日、県の油流出環境影響調査委員会は、3月までの水質・底質、生物調査の結果から、油の分解・拡散が進み、動植物への影響も少なくなっていることを報告した。6月に入り、水産庁も、日本海の水の幸に重油の影響は殆ど認められないという内容の中間報告を発表した。

夏の観光シーズンを前に、県沿岸の景観はほぼ原状回復した。4月下旬には、海で生まれた稚アユの河川遡上が認められた。渚のドライブウエー（千里浜）には車の賑わいが戻り、海水浴場についても安全宣言が出され、珠洲市では、揚げ浜式塩田での塩作りも例年通り行われた。しかし、門前町の琴が浜では「泣き砂」の砂粒が重油で汚れたために音を出さなくなったと言われており、今後、岩の隙間などに残った重油が気温の上昇に伴い溶け出すことも懸念されており、遺恨は多く残されている。

地元の研究者の議論や活動も活発となり、C重油由来の発ガン性物質、重油分解細菌などの話題が新聞紙上によく登場した。また、いくつか自主的な研究グループが組織され、中・長期を想定した海洋生物モニタリングや生物検定についても、現在、積極的に取り組まれている。しかし、大学研究者間のトラブル（発表

内容の新規性に対する疑問、「売名行為」であるとの誹謗中傷）が新聞紙上で話題となったことがあり、研究者の人間性や社会問題への取り組み態度、マスコミの研究報道姿勢について、改めて考えさせられる場面もあった。

生物関係では、海鳥と海藻が話題に上がることが多かった。海鳥については、貴重な繁殖地へ重油漂着状況や油まみれになった鳥の写真をよく目にした。繁殖地の七つ島では、本土沿岸と比べて1万倍以上の重油分解細菌が出現しているということで、これについては、海鳥の糞による栄養供給効果も考えられており、海藻の研究者として大いに関心を抱いた。

前号で述べた海藻との係わりうち、ホンダワラ類については、その後、ほとんど話題にならなかった。一方、岩ノリについては、富来町福浦で予想被害が800万円と報じられたほか、他の地区においても油漂着後に採取された岩ノリ出荷は取りやめとなった。岩ノリについては、来年以降のノリ胞子の着生をほう助する目的で、コンクリート製の擬似岩礁の設置が提案された。これは、自然岩礁の起伏を型取りしたもので、材質の「エコ・コンクリート」は通常よりもアルカリ性が弱いということである。4月下旬、舳倉島に渡った輪島市の漁業関係者らは、油で汚れたツルアラメ（地元でカジメと呼ばれる）などの海藻を処分した。5月に入り、ワカメ収穫の最盛期を迎えたが、生育は順調、品質も上々と報じられた。

私が個人的に何度か相談を受けたのは、潮間帯に生育する海藻の白化現象と重油漂着との関係であった。潮間帯の白化現象については、詳細な継続観察が行われたり深浅移植などの実験が行われたりした例はないが、春の大潮の頃、恐らく、干出期間が長くなったり低温・低塩分水に晒されたりすることが原因で、潮間帯のポリヒバなどの有節サンゴモが漂白したように白くなるとともに、カタノリやシオグサなど、他の海藻も枯死する現象である。この現象はほぼ毎春認められているものであるが、これと重油被害域との識別が困難であるということであった。日頃の海藻群落の構造や変動パターンを把握しておくことがいかに大切なか、改めて思い知らされた事件であった。

（金沢市三社町 3-18-301）